

## 特集 未踏ユースから育ったタレントたち

2

## 野良 OS 開発者の視点

川合 秀実 サイボウズ・ラボ (株)

2000年横浜市立大学大学院卒(修士課程)。2002年IPA未踏ユース採択。2006年『30日ですでできる! OS自作入門』発表。2009年横浜創英短期大学非常勤講師, セキュリティ&プログラミングキャンプ講師。2011年サイボウズ・ラボ(株)入社。  
h-kawai@labs.cybozu.co.jp

私は確かに未踏ユース卒業生ではあるが、決して未踏ユースを代表するタレントというわけではない。私よりも優秀な人たちはたくさんいた。そう考えるとこの文章を書くのは実に恐れ多い。それでも私などにこの原稿を任せるといふことは、おそらく未踏ユースの幅の広さを示したいという選者の意図があるのだろう。それなら私は臆することなく文を書いていける。なぜなら未踏ユース内には個性的な人がたくさんいるが、私はその中でもさらに変人側に属すると自負しているからである。

私はOS開発のテーマで未踏ユースに採択された(テーマ名:新OS, OSASK(おさすく)の開発)。このOSは既存OSの改良ではなく、自分が若気の至りで作った独自仕様のOSを発展させるというものだ。当時はこれで世界が変わるかもしれないなどと思っていたものだが、結局そのOSは完成には至っていない。しかしOSを作ろうという小さなブームは起きた。そういう意味では私のプロジェクトはわずかに世界を変えた。そして私は自分の経験を活かして『30日ですでできる! OS自作入門』を執筆し、このブームをさらに息の長いものにすることができた。

私が作ったOSは結局は世間ではマイナーなOSでしかない。ブームの産物として他の人たちもさまざまなOSを作ったが、やはりそれらもちょっと作って、自分や仲間内で少し遊んで、それで終わりである。その“仲間内”の規模に多少の差はあるが、結局私たちは同類である。このようなOSを“野良OS”と私は呼んでいる。野良猫や野良犬のような、そういう存在に似ているように思うのだ。

野良OSの作者は、多くの場合、比較的小規模なOSを自作して、それでOSの仕組みを大雑把に理解して、それで満足して終わりである。しかしそれでもまだ物足りない者もいるだろう。私もその1人だ。なにかすごいOSを作りたいと思う。私はそういう同志に対して言いたいことがある。それをここに書くことで、私の変人ぶりを表現しよう。

同志よ、君たちは小さくまとまりすぎではないか。常識にとらわれてはいないか。私たちはまがりなりにもOS

開発者なのだ。OS開発者はハードウェア仕様以外の何物にも拘束されないのだ。OSとはこうあるべき、カーネルとはこうあるべき、OSにおけるセキュリティ対策はこうあるべき、ドライバとアプリケーションの違いはかくかくしかじかである、などということはすべて過去のOS開発者たちが作ったしきたりである。学校や書籍でOSとは何かを教わったかもしれないが、それらはすべて過去の偉人が考えたものでしかないのだ。私たちはOSを自作するにあたって、そんなものはきれいに忘れてみてはどうだろう。そんなものに縛られていては、既存OSの真似事を超えることはない。それで君たちは満足できるのか。

確かに世間の多くの開発者は、それらの縛りをいわば常識として受け入れている。疑うこともまずない。それは彼ら彼女らが、普通の開発者だからだ。しかし私たちは違うのだ。私たちはOS開発者なのだ。システムの全体が見えているし、それを自由に設計できる立場なのだ。それなのに既存の枠組みを無批判に受け入れてばかりでいいのか。私たちがやらないで誰がやるのだ。

そうとも私は野良OS開発者でしかない。それが何を偉そうに思うだろう。でもそれゆえに私が何をしたところで社会様に迷惑をかけることもなかるう。野良ではないメジャーなOSであれば、そういう思い切った冒険はなかなかできない。野良だからこそ極端な理想を描いて挑戦することができるのだ。私たちにしかできないことがあるのだ。

私は先日、セキュアな野良OSを設計する機会があった。奇抜なアイデアをいくつか思いついたのだが、その中の1つを紹介したい。私がどのくらい常識を疑ってほしいのか分かると思う。

普通の開発者は、ウイルスにいかにも感染させないかだけを考えるだろう。そういう手法はすでによく考えられていて私の出番はない。私はユーザのセキュリティ意識を高めることが必要なのではないかと考え、定期的に無害な攻撃を受けるOSというものを考えた。が、ここで紙面が尽きてしまった。続きは[http://k.osask.jp/ipsj52\\_12/](http://k.osask.jp/ipsj52_12/)を読んでほしい。  
(2011年9月14日受付)